

報告／部落史研究における身分・階級・物語・commons

友常 勉

要約 この報告では、議論の素材を『部落史研究からの発信』（全3巻、解放出版社、2009年）と近年の近世史研究の身分論の成果に置きながら、①身分論とcommons論、②反資本、③物語論の三本の柱から問題提起をおこなった。それによってこれまでの近現代部落史研究を見直すことができるような文脈を提示しようとした。また、狭義の部落史研究にとどまらない、部落の芸能の復活・再現も論点に加えた。

1 部落・部落民アイデンティティ論と部落民形成論 言語論的転回の反映として

近年、部落問題の研究で部落民アイデンティティ論やアイデンティティ研究がおこなわれている。それらの議論は、アイデンティティ論というより、むしろ、部落民の主体の形成という問題に関する研究といった方向が意識されているのではないか。それが水平社運動史の研究と重なっていたのではないかと思う。そこから話を始めていきたい。

関口寛の二つの論文（「初期水平運動初期水平運動と部落民アイデンティティ」『〈眼差される者〉の近代』2007年、「水平運動における「民族」と「身分」」『近代日本の「他者」と向き合う』2010年）は、連続するテーマで書かれており、主体の形成という問題が扱われている。[関口寛2007]では、水平社運動における自己定義が、「民族」「階級」から「身分」へと推移する過程が示され、それが水平社宣言という対象に集約されていく。[関口寛2010]は、マルクス主義における「階級」概念の翻訳・定義を介して、部落・部落民の定義が、「民族」から「身分」へ推移する過程が示されている。目配りのよい論文で、学知や訳語を通して、どのように部落民の定義にかかわっていくかということ进行分析

しているが、集団の共通感覚にみあった部落の自己定義を模索する過程がそこにあるのはいか、と読んだ。

集団が、自分のアイデンティティをどのようにつくっていくのか。それが制度的な知、共同体、集団の共通感覚の合致によって方向づけられるとして、水平社運動の場合には、「身分」という概念におさまっていくのだろう。

別の言い方をすれば、近代における被差別部落の自己定義というのが、学知、部落の共通感覚、政策的（法主体的）な定義によって合成されていくと思うが、それを促すエネルギーは、自己形成に向けた部落の衝動だといえる。

この自己形成の衝動というのは、第一に国民国家の圧力によって生じる。今西一の研究史の整理（今西一「国民国家論と部落問題」『部落史研究からの発信』第2巻近代編、解放出版社、2009年。以下、『発信』第2巻と略。）では、国民国家の形成のもとで、国民化と部落の言説・表象の推移とが結びつけられている。ひろたまさきは、国民化はまた「帝国意識」につながると論じている（ひろたまさき「近代天皇制と差別」『発信』第2巻）。言語と表象、さらにそのレトリカルな差異化の戦略がアイデンティティを規定していくとする。この把握には言語論的

転回が反映している。

今西の議論の整理は、資料に即した議論ではないが、表象の問題、あるいは「民族」という言葉の定義から、実際の運動を見ていくという意味で、言語論的転回のひとつの表れと考えていい。

また、関口論文に表れているような議論が、これまでのパラダイムとどのようにかわるかということだが、そこで、部落民形成論と〈同化／異化〉というパラダイムとの関係について、朝治武は藤野豊の水平運動研究を批判的に摂取し、秋定嘉和の水平社・融和運動論を継承しながら、「戦時体制と部落」について、水平運動・融和運動・翼賛運動がそれぞれ部落の固有の論理に沿っていたこと、総力戦体制下での「国民一致」は「矛盾に満ちたもの」と論じている（朝治武「アジア・太平洋戦争期の部落問題」『発信』第2巻）。水平社運動の戦争責任論も、戦時体制と部落の実情との相克を分析しながら問題にすべきであるということであろう。朝治論文は必ずしも関口論文と同じ問題意識だとは言わないが、やはり主体形成論というのがひとつの柱になっているのではないか。

すなわち、戦争責任論を論じるにしても、状況との関係のなかで、水平社のアイデンティティがどのように模索されていたのかという戦略が、議論の柱になっている。

どうアイデンティティを選択するかということについて、黒川みどりの「同化／異化」論（『異化と同化の間 被差別部落認識の軌跡』青木書店、1999年）をもじっていえば、どのようなアイデンティティを自分たちがもつかということを考える時点で、すでに〈異化〉が起きている。〈同化〉の方向を考えるのも、〈異化〉の戦略を選ぶのも、どちらも〈異化〉であり、〈同化的異化〉〈異化的異化〉とすべきということになる。私の関心からいえば、政治的なマジョ

リティに対するより存在論的な動揺としての〈不和〉といってもいいのではないかと思う。

そういう自己形成、主体形成という問題をめぐって、研究の特徴が表れている。それはどのように考えればいいか。

自己形成論の視角は、狭義のアイデンティティ論とは区別して考えたほうがいい。むしろ E. P. トムスン『イングランド労働者階級の形成』（青弓社、2003年）で論じられた、共同体的でコモンス的な慣行・共通感覚・経験をとおした〈階級〉形成論に重なる。E. P. トムスンのこの著作は、地域やその社会の中で、どのように自分たちを階級として形成していくのか、革命主体をどうするかという問題意識で書かれているが、当時のソ連や中国からの借り物の議論ではなく、自分たちの力でどういう階級をつくるかということに強い関心があった。関口論文や朝治論文などの自己形成論というのは、E. P. トムスンの『イングランド労働者階級の形成』の方法と重なるのではないか。

一例をあげよう。マルクス・エンゲルスによる1848年の『共産党宣言』（共産主義者同盟綱領）の英訳は、(チャーティスト運動に活発に関わっていた) スコットランド人の Helen Macfarlane によっておこなわれたが（1850年、Red Republican というイギリスの社会主義新聞）、その際、冒頭の「共産主義という幽霊」のドイツ語の「Gespenst [現在の英訳ではspectre]」は（スコットランド民話によく出てくる）hobgoblin（=ゴブリン、子鬼のような妖怪）と訳された（*Helen Macfarlane: A Feminist, Revolutionary Journalist, and Philosopher In Mid-Nineteenth-Century England*. Lexington Books, Oxford, 2004）。自分たちが身近でよく使っている言葉に翻訳して考えようとしていた、ということだろう。そういう言葉をつかうことで、1850年代のイギリスの共産主義者たち

は、共産主義というものを自分たちの社会のなかで、身近な言葉でどう表現できるかと考えていた。E. P. トムスンがやろうとしていたことも、そういう試みだといえる。その意味で、自身を定義する言葉の選択は、慣行や経験、共通感覚に沿っておこなわれる。水平社による部落民論、自己定義が最終的に「身分」に定着していくことの根拠もそこにあるだろう。

さらに、水平社の自己定義が、階級なのか身分なのかということに関して、あるいはその身分の中身が推移していくということの意味をもう少し開いてみたい。

2 身分論との接合

「身分」という概念が、今日また違う文脈で注目されているということ指摘しておきたい。近世の身分論の研究がいまどうなっているのか。『発信』第1巻にも、吉田伸之らの「身分的周縁論」への批判があるが、近世の歴史学界のなかでは、身分的周縁論に対しては多くの批判がある。スタティックな方法で近世社会を分析するというやり方がまるで王道のように見られたり、固定的な身分、法制的な身分から逸脱するものと定義することによって、軸としての身分が、どこかに消えてしまう、そもそも身分の定義が、逆にわからなくなっていくのではないかといった批判である。

藪田貫・深谷克己ら編によるシリーズ『〈江戸〉の人と身分』（吉川弘文館、2010～2011年）も、吉田伸之らの「身分的周縁論」に対する批判から出発している。ただ残念なことに、そうした問題意識が、あのようなシリーズにまとめられると後景化している。身分的周縁論に対する対抗言説を形成しているようには見えない。

とはいえ、そのなかからの論文をいくつかあげておきたい。安国良一（「近世の都市社会と

貨幣」『〈江戸〉の人と身分』1、2010年）は、近世においても、貨幣はモノと身分との関係のなかで交換されていて、「儀礼的貨幣」「身分的財」など、貨幣は身分や人間の附属物だということを江戸時代においても確認できるという提起をしている。

柳谷慶子は、近世において「女」が「身分」として登場してくることを提起している（「ジェンダーの視点から問う身分および身分制」『〈江戸〉の人と身分』6、2011年）。さらに深谷克己は、階級よりも「身分」という概念が通時代的、普遍的なものではないかと主張し、身分概念はまた「表象概念」として把握されている（「東アジアの政治文化」同前）。「所有」「階級」などの概念の使用がそのまま東アジアないし日本の共通感覚から、今日においても、ずれてしまうという理解である。

このシリーズには、部落問題に関して言えば、関口博巨が「弾左衛門支配とその境界」『〈江戸〉の人と身分』2、2010年）という論文を書いている。関口も、現代の格差社会のなかで、たとえば不安定雇用の人たちも、実は身分なのではないか、という話から始めている。そこには身分という概念をもう少し拡張したいという関心が表れている。所有や階級といったマルクス主義の議論の概念で語られていたものも、その社会固有の関係のなかで考え、再定義していくことが必要なのではないかといえるだろう。

ここまでいえば、脇田修の「身分的所有」という概念が思い出されるが、それについては藤沢靖介が「身分」と「所有」という二つの概念を結びつけるのは、マルクスの定義からはあり得ないと批判している（藤沢『部落の歴史像 東日本から起源と社会的性格を探る』解放出版社、2009年）。マルクス主義の概念として無理があったとしても、部落の存在を掴まえるうえでは重要な提起だったのではないかと思う。

『(江戸)の人と身分』のシリーズでは、身分論の提起は部落史から起きたとしている。朝尾直弘や脇田修の議論が生まれ、身分的所有論の議論も部落史から生まれた。そういう意味では一連の身分論の提起は部落史研究の成果がもたらした。それがいま近世史のなかに流れ込んで、主たる問題になった。では、当の部落史はいま何をしているのかと、逆提起されているのが現状だといえる。しかし、『発信』第1巻には、そのような問題意識で書かれた論文はないようである。近世部落史研究においては、部落史研究のなかで提起された身分という重要な概念をもって社会をもう一度見直していくという関心がまだまだ希薄ではないか。

藤沢靖介はかつて峯岸賢太郎の「勸進共同体」「関係性の所有」としての旦那場論の意義を指摘することで、身分論の重要性を主張している(前掲、藤沢)。近代における部落の存在を諸関係のネットワークから説明するという試みは、『図説 水平社運動』(「仮称」水平社歴史館建設委員会編、解放出版社、1996年)でもなされている。このなかの水平社運動についてのいくつかの文章は、近世的な身分の把握から展開されている。また朝治武が戦前の犬皮統制会社の資料などを参照した論考(「全国水平社消滅をめぐる対抗と分岐」『アジア・太平洋戦争と全国水平社』解放出版社、2008年)は、やはり被差別部落の共同体のネットワークを踏まえた産業論といえるのではないか。そういう意味では身分、諸関係というものから、諸関係の総体としての被差別部落、部落民という存在を考えることは、身分をキータムとしてはいないが、近代の研究のなかにも生きているといえる。

3 反資本の視点

ただ、身分論では資本との関係がうまく説明

されていない。ここで、反資本なり資本との関係を提起していく必要があるだろう。これも部落史とは異なる文脈から参照する。1970年代以降、イタリアのアウトノミア運動を出自として、反資本のコモンズ論の潮流が形成されてきた。

そこで重要なのは、原始的=本源的蓄積という概念である。イタリアのマルクス主義フェミニスト、マリアローザ・ダラ・コスタに『家事労働に賃金を』(インパクト出版会、1986年)という論文集がある。そこで明らかにされたのは、家事労働という不払い労働の領域が資本主義形成期につくられ、その領域を前提にして労働力の生産・再生産が可能になるということである。実際に、資本主義は、賃労働と資本の関係で、男性労働者からの収奪によって剰余価値がつくられるというだけではなくて、そのためには女たちが家の中で男のために奉仕し、食事をつくり、育児をするということが前提になっている。だから資本主義の形成においては不払い労働こそが最も重要だという提起がなされた。

原始的=本源的蓄積をめぐる、良民労働力と膨大な不払い労働領域の創出とが不可分であるとする議論を現在代表しているシルヴィア・フェデリッチの『キャリバンと魔女—女性、身体、原始的蓄積』の議論を参照する(Silvia Federici, *Caliban and the Witch: Women, the Body and Primitive Accumulation*, Autonomedia, 2004、未翻訳)。17世紀から18世紀にかけて西ヨーロッパで囲い込み運動が起きて、コモンズ、つまり入会地から農民が追い出されていき、その入会地を商品化して地代を取り、最初の収奪がなされる。そこで地主階級なり初期の資本が形成され、それが資本主義の最初の第一歩となる。この本源的蓄積は同時に「キャリバン」と「魔女」という二つのマイノリティ、マージナルな集団を創出する機会でもあったとフェデ

リッチは論じている。

フェデリッチはアフリカのナイジェリアで教えていたが、アフリカはまさにキャリバン、奴隷労働がつくられたと同時に、21世紀においても依然として収奪にさらされ、ポスト植民主義の状況のなかで、西欧資本によって安価な労働力を収奪されている場所でもある。それを目の当たりにして、フェデリッチは、本源的蓄積という、資本主義の最初の段階でつくられる蓄積としてマルクスが用いた概念というのは、日々起きていることだと再解釈する。

フェデリッチは西洋社会における魔女狩りが資本主義の形成、とりわけ原始的蓄積にとって決定的な意味を持っていたとする。魔女狩りがピークに達する1580～1630年は、イギリスの第一次エンクロージャーの時期に重なる。同時にこれはアメリカ大陸で植民地化・奴隷労働が進行した時期でもある。フェデリッチによれば、これは女性を産む性＝労働力の再生産の手段とするための女性身体の〈エンクロージャー〉である。資本主義の形成とともに女が家事労働に閉じ込められるが、これがもう一つの〈エンクロージャー〉だとする。魔女狩りというのは、家事労働に落とし込められることに甘んじない女性たちを排除し、抑圧するためのひとつの社会的な制裁であった。だから、魔女狩りとは、近代的労働力の生産と再生産の社会的基盤を創出するために、女性の反資本主義的、反労働力再生産的な身体性を圧迫することに目的があったと、フェデリッチはいう。つまり、一夫一婦制を守らない、一揆や民衆暴動に進んで参加し、家父長的秩序を受け入れない女性の行為、さらに異性愛原理を拒否する振る舞いを弾圧するために、異教を信奉し、男を誘惑する〈魔女〉という表象がつけられた。それによって不払い労働が正当化、合理化され、シャドウワークとしての家事労働がつけられていく。そして労働力

の生産・再生産が無償化・非可視化される。しかもこうした〈魔女〉のイメージというのは、植民地における先住民支配やプランテーション経営においても機能していた。植民地アメリカにおける先住民や、奴隷としてアフリカから移送されてきた人びとは異教の信仰と習俗を信奉する悪魔＝キャリバンとみなされ、キリスト教化の対象とされたからである。つまり、植民地化とキリスト教化というのは、〈魔女狩り〉とほぼ重なって進行し、資本主義の原始的蓄積を果たしたのである。キリスト教化とは、労働力を近代的労働力へと作り変え、勤勉に働く良民へと変えるための圧力である。だから、女性と先住民の身体、土地、労働の植民地化とキリスト教化は、近代的労働力のための規律化・規範化として、今日のグローバリゼーションの過程で日々発生していることである。

ではこれを日本のプロセスのなかで考えればどうか。すぐ連想されるのは、1637年の島原の一揆による異端審問とその前後に成立してくる宗門改め制度、それによる人口管理政策による単婚小家族の形成である。農民に土地の占有と自由な耕作が保障される代わりに、女性の性別役割分担の固定化（「女の身分」化）が進んでいく（柳谷、前掲）。他方、中世の寺社権門が、近世には宗門人別制度の出先機関となり、武家権力の支配の手段に転換したのにもない、寺社に帰属していた宗教的芸能民はその正統性を失っていく。さらに、17世紀後半の生類憐れみの令のような武家政権の仁政イデオロギーによる統治と、服忌令の改編によって、ケガレ意識と殺生への忌避が昂じる（横田冬彦『日本の歴史16 天下泰平』講談社、2009年、原本は2002年）。

すなわち、近代につながるような単婚小家族と社会的な差別の形成の原点は江戸時代にあったのであり、性による差別と分業が大きな役割

を果たしている。これはフェデリッチの議論と重なることである。

こうして、近世初頭の農業中心的な家父長制的〈家〉の制度化、深谷克己のいう「華夷良賤」にもとづく身分序列（深谷、前掲）、〈良民〉という価値の創出を通して、膨大な不払い労働領域が創出される。それが日本における資本の原始的蓄積である。単婚小家族の成立と「女の身分」化、近世賤民制度の確立を、日本近世における〈魔女〉と〈キャリバン〉の創出の嚆矢と理解してはどうか。

さらに本源的蓄積論をふまえて、明治初頭の地租改正から解放令の意味を明らかにした上杉聰の議論（上杉「明治維新と賤民廃止令」『発信』第2巻）を再解釈すると、解放令というのは部落の共有財（あるいは身分的財）に対するエンクロージャー＝囲い込み運動に他ならない。部落の旦那場と斃牛馬の処理を部落の一つの身分的財として考えるとすれば、斃牛馬勝手処理令はそれを解体、剝奪することによって、自由な労働力、自由な商品として、部落民と部落の身分的諸関係を自由競争のなかに投げ込むことになる。

このとき囲い込みの対象となっているのはコモنز（入会地、共有財）である。網野善彦のいう「無縁」、旦那場、「勸進共同体」もまたコモنزである。それは寺社、あるいは村落共同体に服属し、村落外、共同体外のを排除する排外的な性格を持っている。しかし、入会地や共有的な場は、慣行や祭礼が行われる場であり、祝祭空間でもある。旦那場の慣行が商品経済の論理に浸食されるように、また恩頼的なネットワークがそのまま親方—子方のヒエラルキーによる収奪の場になるように、コモنزは本源的蓄積のリソースとなる。さらに、本源的蓄積がおこなわれるときに、部落の旦那場がもつ様々な負性、呪術性やケガレのタブーは、部

落自身に責任転嫁され、自ら解決しなければならないものとして、部落に負わされる。すなわち部落に対して良民化という圧力がかけられる。部落が持っている、旦那場や皮革技術、芸能などの身分的財に対するタブーが作りだされ、タブーがあるからこそ、逆にタブーを隠したり、タブーを負い目に思うということになる。このようにして、部落は良民化のための見えない努力、自己規律を課されることになる。

ただし、コモنز的なものはなくなる。コモنزの解体は資本は可能だが、しかしそれは本源的蓄積に先行する慣行の領域として存続する。それが封建遺制の問題にかかわる。そうした慣行（旧慣）や、人とモノとの呪的關係、資本制との葛藤・抵抗の関係を包摂していることで、コモنزが存在している。これを贈与互酬関係といいかえてもいい。〈身分〉がコモنز的な側面をもっているといってもいいだろう。逆にいえば、本源的蓄積が不断に可能であるのは、日本社会に身分的コモنز、身分的財が遍在するからである。階級に還元できない慣行的な諸関係、そういうトラディショナルな諸関係。社会に伝統があるということが、すでにその社会にコモنز的なものがあるということであり、それに対して資本は常に自由化、商品化の圧力をかけている。そこでさまざまな葛藤が生まれていく。

解放令をエンクロージャーと考えるとすれば、現在の土地差別も、不断のエンクロージャーのプロセスと考えてもいい。土地の商品化というエンクロージャーの圧力がいつもかけられている。すると部落の身分的な存在が、その都度顕在化する。つまりエンクロージャーというのは、土地の自由化、商品化という資本による収奪であり、この収奪が、同時に様々な混乱を招く。伝統的なものと資本との葛藤、慣行と近代化との葛藤といった混乱を生み出すことにな

る。この意味で解放令、斃牛馬勝手処理令的な状況は不断に起きている。あるいは、資本主義というのは不断に部落に対して解放令、斃牛馬勝手処理令と同じことを繰り返しているといってもいいのではないか。

西川長夫は「国民は広大な『最初の植民地』であった」(西川『〈新〉植民地主義論』平凡社、2006年)と言ったが、植民地化されるということは、その前に、均等でない様々なばらつきがあったということであり、それが植民地化を可能にするわけだが、その含意のなかには、部落における本源的蓄積をめぐる様々な問題というものも考えてもいいのではないか。

4 物語論

必ずしも近代部落史研究にとどまるものではないが、ここでもう一つ提起しておきたいのが物語論である。物語論は、物語論研究のなかでは活発な議論があるが、部落史研究にほとんど反映されていない。物語論とは、もともとは源氏物語研究と平家物語研究だったが、そこから古事記や日本書紀研究にひろがっていった。王権論、反王権論が日本の物語論の中心であり、最先端の文学理論が応用される場所でもある。

ひろたまさきの「帝国秩序と帝国意識の解体が差別する天皇制の解体になる」(ひろた、前掲)という問題提起を、身分論、身分的文化の議論から考えてみたい。つまり、「差別する天皇制の解体」とはどのように模索されてきたかということだ。赤坂憲雄・兵藤裕己・山本ひろ子『物語・差別・天皇制』(五月社、1985年)では、中上健次をゲストに招いて、中世説経節から「河原巻物」が包含している反王権の物語を析出した。同様の試みはすでに中上の紀州の部落のルポ(中上健次『紀州 木の国・根の国物語』朝日新聞社、1978年)、乾武俊の翁論(乾『黒い

翁 民間仮面のフォークロア』解放出版社、1999年)で示唆されている。

中上は紀州のルポで、部落に伝わる昔話を聞き取っている。「キンジニヤニヤ猫の声すれば、ここは袋の御用ねずみよ」という鼠浄土の物語である。正直者の男がおにぎりを持っていくと、おにぎりがころがって鼠の穴に落ちる。そこには宝物があって、正直者の男が鼠から宝物をもらおうという話。この物語のバリエーションを部落の中で発見するが、「キンジニヤニヤ猫の声すれば」という言葉に中上は触発されて、その意味を考えるために、宮本常一に会いに行く。宮本は「キンジ」は「禁裏」つまり朝廷のことだと中上に教える。そこから中上が考えたのは、「キンジニヤニヤ」、つまり「ニャーニャー」と猫が鳴いたときに鼠たちがすぐ逃げないと、袋の穴で、猫に食われてしまうぞという意味。鼠たちがいるところが「キンジ」。天皇がいるところだとして、鼠の王権、鼠の天皇の世界に転換してしまっているのがまずおもしろいと中上は考えた。もう一つ、鼠浄土の物語と中上が古座で拾った昔話が違うのは、鼠の穴の中で、鼠たちは餅を搗いているのだが、それが姉さんかぶりをした鼠たちだったということ。他の鼠浄土の物語はただの鼠なのに、部落に伝わる鼠はなぜ姉さんかぶりをしているのか、そこに母権制、母系制の系譜があるからではないかと、中上は考えた。そんな発想の飛躍をもって、「キンジニヤニヤ猫の声すれば」というもののイメージを、紀州全土の部落のなかで追求する。それが最大のモチーフとなって、あの本が書かれている(なおこれについては、拙稿「労働・縁起・構想力——宮本常一、中上健次、サビエル・サンチョテナ」『現代思想』11月臨時増刊号「総特集 宮本常一」vol.39-15、2011年も参照されたい)。

すなわち、「キンジニヤニヤ猫の声すれば」は、

部落が自分たちのなかで既成の秩序を転換する、聖と賤の価値のヒエラルキーを転換する、物語創造の試みが部落のなかにあったということである。「ニヤニヤ猫の声すれば」魔法が解ける。猫が来たら鼠の魔法は解けてしまう。解けるけれども簡単には解けない。鼠浄土もそうだし、部落の「キンジニヤニヤ」の物語もそうだが、どちらも最後に落ちがついている。正直者の若者の真似をして、隣の欲深じいさんが、同じようにおにぎりを穴の中に落として、鼠から宝物を取ろうとする、そこで猫の声を出してしまう。猫が来たぞと言うと、鼠たちはあわてて逃げるが、そのときに穴を閉められてしまって、欲深じいさんは生き埋めになってしまう。つまり、魔法を解いてしまっただけではいけない。魔法を解けば残酷な仕打ちを受ける。それが聖と賤の関係の問題だということまで、その物語を持っていく。それは中上の想像の世界であり、論証できない。しかし、説話世界が持っているエネルギー、反権力的な発想や思考を、部落史研究は生かさなければいけないし、評価しなければいけない。

「河原巻物」についての山本ひろ子の研究や乾武俊の翁論などの数少ない成果はあるが、なかなかそれが生かされていない。しかし、物語論や芸能論は、実証史学よりも宗教思想史と批評の世界で発展し、また、物語はそれだけで自律性があり、自律的に運動していくので、部落そのもの、部落の人びとの動きには重ならない。しかし、その問題提起は重要である。喜田貞吉よりも柳田国男、柳田国男よりも折口信夫が重視したことである。つまり芸能の起源と賤民の起源の両方が重なっているということはどう考えるのか、という問題とかかわっている。そこに接近していったのが宿神論（服部幸雄『宿神論—日本芸能民信仰の研究』岩波書店、2009年）や摩多羅神論（山本ひろ子『異神—中世日本の

秘教的世界』上下、ちくま学芸文庫、2003年、中沢新一『精霊の王』講談社、2003年）である。摩多羅神論では、芸能の神なのか修行の本尊なのか、宗教思想と芸能哲学とのあいだにかかわる大きな論点をはらんでいるが、そういった部落史が生かすべき広大な領域が存在している。

このような研究が生かせなかったのは、中世日本紀研究が消化されていないということもあるだろう。古事記や日本書紀を中世に大きく改変することで、中世神学が形成されるわけだが、その史料は古事記や日本書紀を読むように普通に読めるテキストではない。しかし、実は「河原巻物」を理解するためには中世日本紀の消化が必要である。思想史にかかわるそうした視点の転換によって、宗教的救済に傾倒した戦後の西光万吉の作品など、これまで十分な議論をつくれなかった資料や文学テキストを扱うことができるだろう。すなわち、部落史あるいは部落問題研究からのテキスト論を差別—反差別の構図にとどめることなく論じるための文学理論・想像力理論をつくりだすために必要だと考えるのである。それが「差別する天皇制の解体」という課題に答えることだと思う。つまり、部落史研究と反天皇制論がどう関わるかという問題である。そしてこれは文字テキストの領域にとどまらず、文化的実践の領域にもかかわる。そのような含意で、最後に部落の伝統芸能の再現運動に触れたい。

なお、盲僧や門付けの宗教哲学である地神経については、東アジア大での共同研究も存在する（永井彰子『日韓盲僧の社会史』葦書房、2002年）。沖縄・奄美・八丈島の伝承とのかかわりも重要である。

5 身体的実践

部落のもつ伝統芸能の再現の試みは、政治闘

争としての部落解放運動とは別のところで実現された。村崎修二や辻本一英などによって、部落の芸能が復活されたが、それは近年の部落にかかわる問題として重要である。村崎は、猿舞座が形成されるときに小沢昭一や宮本常一がどれだけ重要な役割を果たしたか、大道芸、伝統芸能とのかかわりを記している（『花猿誕生 道ゆく芸能をもとめて』清文堂書店出版部、1986年）。部落解放運動にとどまらない広汎な社会的文脈が可能にしたといえよう。また、辻本らによる「阿波木偶箱廻しを復活する会」は、狭山闘争を契機に、徳島で青年友の会が組織され、その後にムラの聞き取り調査が進められる中で準備されていった。新左翼世代、狭山闘争世代の文化運動の結実として、「阿波木偶箱廻しを復活する会」などの成果が生まれたとっていいだろう。

「本仕込み」によって村崎が猿廻しを復活するプロセスも、部落解放運動とはまったく別のところで、独自に発見されていく試み、オリジナルな試みだということも知っておくべきだと思う。

辻本の阿波木偶箱廻しに関しても、中内正子や南公代が芸人として、時に民間信仰の担い手として登場するのは、重要なことだと思う。つまり、自分たちのなかから脱近代的で脱人間中

心主義的な文化をつくっていくことが可能になったということを意味している。その際、部落史研究そのものではないが、その周縁のところで行われた運動研究、歴史研究、思想研究がつながっているというのが重要なことだと思う。

これらの文化的実践は政治闘争の後退期に、コモンズとしての部落の再建をめざした試みである。または反差別闘争が生み出した一種の文化革命である（その意味で政治闘争とのタイムラグを経て文化革命の運動が部落解放運動の周辺から生まれたといえる）。

1984年に佐渡で第1回芸能大学が開かれるが、そこに網野善彦ら中世史家が深く関与していたことも重要だと思う（北川鉄夫・第一回芸能大学実行委員会編『佐渡の芸能』文理閣、1986年）。歴史研究のジャンルだけではなく、芸能の創造という実践に網野らもかかわっていたということ、部落解放運動なり部落史研究の延長として理解しておいていいのではないか。また、こういう関与を可能にした80年代の中世社会史の底流にあった反資本・反商品制的な文化革命論も再考すべきである。それは部落史研究や部落問題の研究がどのような文化運動・思想運動とつながるべきなのかを示唆しているのではないだろうか。

参考文献

- 関口寛（2007）関口寛「初期水平運動と部落民アイデンティティ」黒川みどり編著『〈眼差される者〉の近代』解放出版社
- ——（2010）関口寛「水平運動における『民族』と『身分』」黒川みどり編著『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社
- 今西（2009）今西一「国民国家論と部落問題」黒川みどり編著『部落史研究からの発信』第2巻近代編（以下、発信2と略）、解放出版社
- ひろた（2009）ひろたまさき「近代天皇制と差別」発信2

- 朝治（2009）朝治武「アジア・太平洋戦争期の部落問題」発信2
- 黒川（1999）黒川みどり『異化と同化の間 被差別部落認識の軌跡』青木書店
- 友常（2011）友常勉「狭山闘争の思想史・試論——戦後部落解放運動史のために」東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』12/13合併号
- トムスン（2003）E. P. トムスン著、市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社
- 安国（2010）安国良一「近世の都市社会と貨幣」宇佐美英機・藪田貫編『〈江戸〉の人と身分』1 都市の身分願望（以下、身分1と略）、吉川弘文館

- 柳谷 (2011) 柳谷慶子「ジェンダーの視点から問う身分および身分制」大橋幸泰・深谷克己編『〈江戸〉の人と身分』6 身分論をひろげる(以下、身分6と略)、吉川弘文館
 - 深谷 (2011) 深谷克己「東アジアの政治文化」身分6
 - 関口博巨 (2010) 関口博巨「弾左衛門支配とその境界」身分2
 - 藤沢 (2009) 藤沢靖介『部落の歴史像 東日本から起源と社会的性格を探る』解放出版社
 - 水平社歴史館 (1996) 「(仮称) 水平社歴史館」建設推進委員会編『図説 水平社運動』解放出版社
 - 朝治 (2008) 朝治武「全国水平社消滅をめぐる対抗と分岐」『アジア・太平洋戦争と全国水平社』解放出版社
 - 友常 (2003) 友常勉「都市における部落問題の形成について——東京・荒川区(三河島)の皮革産業の場合」小林丈広編『都市下層の社会史』解放出版社
 - ダラ・コスタ(1986)マリアローザ・ダラ・コスタ著、伊田久美子・伊藤公雄訳『家事労働に賃金を』インパクト出版会
 - フェデリッチ (2004) シルヴィア・フェデリッチ『キャリバンと魔女—女性、身体、原始的蓄積』(Silvia Federici, *Caliban and the Witch: Women, The Body and Primitive Accumulation*, Autonomedia, 2004. 未翻訳)
 - 横田 (2009 [2002]) 横田冬彦『日本の歴史16 天下泰平』講談社
 - 上杉 (2009) 上杉聰「明治維新と賤民廃止令」発信2
 - 西川 (2006) 西川長夫『〈新〉植民地主義論』平凡社
 - 赤坂・兵藤・山本 (1985) 赤坂憲雄・兵藤裕己・山本ひろ子『物語・差別・天皇制』五月社
 - 中上 (1978) 中上健次『紀州 木の国・根の国物語』朝日新聞社
 - 乾 (1999) 乾武俊『黒い翁 民間仮面のフォークロア』解放出版社
 - 友常 (2011) 友常勉「労働・縁起・構想力——宮本常一、中上健次、サビエル・サンチョテナ」『現代思想』11月臨時増刊号「総特集 宮本常一」vol.39-15
 - 服部 (2009) 服部幸雄『宿神論—日本芸能民信仰の研究』岩波書店
 - 山本 (2003) 山本ひろ子『異神—中世日本の秘教的世界』上・下、ちくま学芸文庫
 - 山本 (2009) 山本ひろ子「摩多羅神紀行、あるいは服部幸雄『宿神論』の彼方へ」『文学』10巻4号
 - 中沢 (2003) 中沢新一『精霊の王』講談社
 - 永井 (2002) 永井彰子『日韓盲僧の社会史』葦書房
 - 村崎 (1986) 村崎修二編著『花猿誕生 道ゆく芸能をもとめて』清風堂書店出版部
 - 北川 (1986) 北川鉄夫、第一回芸能大学実行委員会編『佐渡の芸能』文理閣
- (本稿は、2011年8月28日、大阪人権博物館にて、座談会に先だって行われた友常報告の文字起こしをもとに再構成したものである。)